息触るるほどに膝行涅槃絵図う	天を衝くセコイア並木芽吹きそむ せ	ビル風に立ちて人待つ春ショール	春うらら池塘を亀のずり落ちぬせ	蔵元を訪へば梅が香満ちにけり	薄氷を踏みし園児の列乱れか	魚屋の口上長き遅日かなむ	人住まぬけはいの庭に梅匂ふ	霞む日の暮れて眉山の電波塔素	鉢にぶら下がる苺の二三粒は	参道を行けば囀り天降るごとこれ	春疾風三角波を研ぎにけりわ	ゆくりなき初音に辺り見渡せり 小	節分草足首埋まる腐葉坂 愛	春風や大瀬戸渡る波の綺羅わ	二〇二一年二月二七日
つぎ	いじ	う 子	いじ	袖	か し	ベ	し 子	秀	く 子	こすもす	か ば	袖	正	か ば	
								毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年二月二八日		ダイヤ婚寿ぐ金盃に桃の酒 宏	手をつなぐ偕老に山笑ひけり うつ	幾万歩踏みし古道や山笑ふ	玻璃磨く春の山河を撫づるごと	廃業の酒屋の軒の古巣かななつ	海苔粗朶の市松模様風光るうつ
								日日		虎	ぎ	士	士	き	ぎ